

せご三平の
ゆかいな童話集

せご 三平

でべそ和尚と
狐の嫁入り

木魚をポクポク叩きながら、和尚さんと小僧さんが、並んでお経をあげておりました。

和尚さんのふところで、携帯電話が鳴りました。着メロはディープ・パープルというバンドの、ハードロックでした。

「あ、もしもし。いやあ、今週はかなり我慢の相場でした。ニューヨークが上げたにもかかわらず、寄り直後から急落しましたからなあ。為替介入を警戒しなければならなかったり……我慢強くコツコツでしたが、利益伸ばせるポイントで入っているにもかかわらず、利幅伸ばせない課題がなかなか解決しません。あー、拙僧は今、お勤め中です。詳しい話はまた、後で」

和尚さんは電話を切ると、お茶を一口飲みました。

小僧さんが声をかけます。

「和尚…」

「なんじゃ？」

「株って、儲かりますか？」

「うむ。珍念よ。儲かるという言葉はあんまりよくないの。でも、檀家さんからいただいた大切なお布施じゃ。上手に運用して、増やさねばならんからな」

「しかし、和尚…」

「なんじゃ？」

「仏の道と、株の運用とは、どのような関係になっているのでしょうか…？」

「うむ。珍念よ。あんまり深く考えるのはよくないの。お勤めが済んだら出かけましょうぞ」

「どちらへ？」

「温泉じゃ。お湯につかってゆっくりして、おいしいものでも食べましょう」

「和尚…わたしはこの寺に修行に来たのですが…こんなに楽しいことばかりで良いのでしょうか？」

「あー、気にすることはない。楽しいことは良いことじゃからの」

高速道路を疾走するのは、ハーレー・ダビッドソンという大型バイクです。

袈裟をヒラヒラさせながら、和尚さんがアクセルを吹かします。

後部座席には、小僧さんが必死でしがみついています。

「和尚ー！！」

「なんじゃー？？？」

「安全運転で、お願いしますー！！」

「あーはっはっは、珍念よ。お前は修行が足りん」

和尚さんは、フル・スロットルで、他の車をぶっちぎって、ジグザグに走っていきました。

ひなびた温泉場の、露天風呂の脱衣場で、和尚さんが袈裟を脱いでいます。

小僧さんは、和尚さんのお腹に、大きな絆創膏が貼ってあるのを目にしました。

「和尚...」

「なんじゃ？」

「その絆創膏は...？」

「うむ。珍念よ。人には誰でも知られたくない秘密というものがあるのじゃ。そっとしておいておくれ」

小僧さんはニヤリと笑うと、手を伸ばして、絆創膏をベリッと剥がしました。

ぷるると、大きなでべそが現れました。

「あははははっ」

小僧さんは笑いました。

バイクの後ろでこわい思いをさせられた仕返しのつもりだったのかもしれませんが。

和尚さんは、真っ赤になりました。

「珍念よ。お前.....最近調子に乗り過ぎておるぞ」

「でも和尚。仏に使えるものが、そんな、でべそぐらいで悩むのはおかしいんじゃないですか」

「でべそって言うな」

「あはははは」

小僧さんは、走っていくと、露天風呂にドボンと飛び込みました。

「キャッ」

若い女性の声がしました。

和尚さんが声の方に目をやると、たいへんな美人が一人、先にお湯につかっていたのです。

「ややや、ここは混浴じゃったか」

和尚さんは思わず、でべそに手をやって隠しました。

それでも、逃げ出すわけにもいきません。

和尚さんは、覚悟を決めて、お湯につかりました。

「ねえ、おねえさんはどこから来たの？」

小僧さんが美女に尋ねました。

「さあ、どこかしら。あそこのお山からかもよ」

おねえさんは、いたずらっぽく、笑って言いました。

「お山？あんなところに人が住んでるの？」

「さあ、どうかしら。あたし、人間じゃないかも」

「え？人間じゃない？じゃあ何？」

「きつね」

和尚さんは笑いました。

「そういえば、この辺りには、九尾の狐の伝説がありますな」

「九尾の狐って？」

「しっぽが九つある、狐の妖怪じゃよ」

「ふーん」

おねえさんは、黙って微笑んでいます。

お風呂からあがると、おねえさんは、温泉宿のロビーでテレビを見ていました。

どうやら、一人旅のようです。

「珍念よ」

「なんですか、和尚」

「拙僧の一生の頼みを聞いてくれぬか」

「だからなんですか、和尚」

「もしよかったら、お食事をいっしょにいかがですかって聞いて来てください」

「誰にですか？」

「誰にとって……、いじわるしないで、ね、珍念ちゃん」

「和尚…」

「なあに？」

「しつこいようですが、こういうことと、仏の道とどういう関係が……」

しぶしぶながら、小僧さんは、おねえさんのところに和尚さんのメッセージを伝えに行きました。

おねえさんは、ニッコリ笑ってうなずきました。

「じゃあ、今晚だけね。あたし、きつねだけど、それでもいいのって、和尚さんに聞いて来て」

「けっこうけっこう。狐でも狸でも、こんな美人なら死ぬまで化かされたいわい」

そう、和尚さんは言いました。

一晩だけのつもりの食事が、実に、三十回近くにもなりました。

その晩から降り出した豪雨のために、国道ががけ崩れで不通になり、その温泉場は孤立してしまっただけです。

帰れなくなった温泉客は、宿にとどまるしかありませんでした。

そして、その間、和尚さんは本格的に、おねえさんと恋に落ちてしまいました。

足止めを食っているときでも、和尚さんは携帯電話で指示を出して、株の取引を続けていました。

それから、ホテルに電話をして、結婚式の予約を入れました。

そして、国道が開通になった日、和尚さんは、おねえさんにプロポーズしました。

「きつねでもいいんですか？」

おねえさんは、またそう言いました。

「いい、いい。なんでもいい」

和尚さんは答えました。

一晩だけのつもりの食事が、その後五十年続きました。

子宝にも恵まれ、二人は幸せに暮らしました。

そして、二人の金婚式の日、二人はまたその温泉場を訪ねました。

露天風呂は、昔と変わらない場所にありました。

お湯につかって、今はもうおばあちゃんになってしまったおねえさんは、あの山を見つめていました。

そして、静かに涙を流しました。

和尚さんは、おねえさんが、自分のことをきつねだと言っていたことを、五十年ぶりに思い出しました。

その涙が、きつねの故郷を思い出してのものだったのか、それとも、和尚さんとの五十年の苦労を振り返っての、感傷の涙だったのか、和尚さんにはわかりませんでした。

和尚さんは、何も言わず、ただ、お湯で顔をバシャバシャ洗いました。

遠くで、狐が一声、コーンと鳴く声が聞こえました。

日が照っているのに、雨が降り出しました。

「狐の嫁入りだ」

和尚さんは、つぶやきました。

おわり